

二〇周年へむかつて

鍋谷 堯爾

一九七〇年四月、福音主義神学会が発足、以来十年、昨年、十周年の諸行事を無事終えることができ、今、新たに
つぎの十年にむかつて力強く歩み出そうとしている。これまで、聖書の十全靈感を信じる福音主義キリスト教の立場
に立ちながら、神学的研究と、教会の健全な成長と発達への貢献という二つの目的を遂行し得てきたところに神のみ
摂理のあることをおぼえさせられている。すでに第三号序において榊原理事長が述べているように「牧会伝道のかた
わら神学研究を進めることはきわめて困難なこと」であるが、それにもかかわらず、本神学会が、内外にその存在を
認められ、会員も漸増していることは、本会の目的が、神のみ旨にそつたものであることを確信させるのである。

たとえば、西部部会のみを例にとると、現在の会員一二三名中、牧師は七〇名（五七パーセント）であるが、神学
校関係者は二三名にすぎず、しかも、専従者は九名にすぎない。又、大学教授は九名、宣教師八名、その他となつて
いる。東部部会の割合も同じようなものであるが、この統計から、教会成長、教会の建徳、福音宣教のわざ抜き
の福音主義神学は考えられず、又、逆にいえば、現場の牧師が、あらゆる困難をこえて、み言に立つ、学的な研究と弁証
の必要性をおぼえているともいえよう。そのためには、これまでも増して、部会研究会、地域的な研究会を開ける
よう配慮することと同時に、学的な対話を他領域とのかかわり、あるいは、国際間ですすめることにより、福音主義

的な立場に立った学問がよりゆたかで深みをもち、困難を超えるために支払った犠牲にあまりある成果を得るような方向づけが必要とされるであろう。「私たちは、真理に逆らっては何をするともできず、真理のためなら、何でもできるのです」(コリント第二・十三章八)

東部部会活動報告

(一九七九年四月から一九八〇年九月まで)

東部理事会書記

大滝 信也

一九七九年度

一九七九年四月二十三日(月)日本アッセンブリー教団中央福音教会にて総会が持たれた。まず午後一時三十分より村瀬俊夫氏の司会により礼拝が行なわれ、下村茂氏による説教があった。午後二時より三時まで理事長佐布正義氏の司会の下に総会が開かれた。この日のシンポジウムの主題は「福音主義の聖書観」であった。三時から五時三十分までのシンポジウム(司会は宮村武夫氏)ではこの主題の下に小林和夫氏が「福音主義の啓示論・靈感論をめぐって」、また安田吉三郎氏が「聖書論と歴史的・批評的研究」という発題をし、それに続いて質疑応答の時を持った。五時三十分から六時三十分まではアジア神学会総主事のB・ロー博士を囲んでの歓迎愛餐会を行なった。七時から八時三十分までの夜のシンポジウムでは宇田進氏が「現代アメリカ福音派における聖書論の動向」、小島彬夫氏が「聖書論と教会形成」という発題をし、続いて質疑応答の時が持たれた。この夜のシンポジウム時にB・ロー博士より短い挨拶があった。六月十一日(月)夕、日本同盟基督教団国立キリスト

教会牧師館にて東京地区旧約部会が開かれた(テキストは K. A. Kitchen, *Ancient Orient and Old Testament*)。六月十二日(金)(午後六時より八時三十分まで)に日本アッセンブリー教団中央福音教会を会場に理事会が持たれた。十月二十六日(金)(午後五時より九時まで)日本基督教改革派教会東京恩寵教会を会場に理事会が行なわれた。この時高力弘一郎氏の諸般の事情による書記辞任を認め、大滝信也氏の書記就任を認めた。この理事会では来るべき一月の十周年記念神学研究会議の準備に関する事項を議した。十一月五日(月)夕、聖書神学舎を会場に東京地区旧約部会が持たれ、西満氏が「最近における族長伝承研究の紹介、特にマラマツト、ドウ・ボー、ヴァンセーターを中心として」という題の発表をした。十二月七日(金)(午後五時三十分より八時三十分まで)日本アッセンブリー教団中央福音教会を会場に理事会が開かれた。この時は主に十周年記念神学研究会議の準備に関する事項を議した。一九八〇年一月二十一―二十三日に天城山荘を会場に日本福音主義神学会十周年記念神学研究会議が行なわれた。主題は「福音主義の立場に立った聖書釈義の諸問題―その方法と展開」で主講師はカール・ヘンリー博士であった。一月二十六日(土)(午後六時より八時まで)お茶の水学生キリスト教会館を会場に十周年記念講演会が持たれ、カール・ヘンリー博士が「福音主義とはどういう意味か」という題で有益な講演をされた。二月一日(金)(午後五時より八時まで)に都内文京区の椿山荘でカール・

ヘンリー博士を囲んで理事会が夕食会を持った。二月十一日（月）単立東京聖書教会にて東京地区旧約部会が持たれた（発題者は松本任弘氏）。三月七日（金）（午後五時三十五分より八時三十分まで）日本アッセンブリー教団中央福音教会を会場に理事会が行なわれた。この時は主に四月の総会の準備をした。三月末現在で東部正会員は百三十八名、準会員は三十名である。なおこの一年間新入会正会員は十三名、西部部会への転出正会員は三名、退会正会員は七名であった。

一九八〇年度

四月十四日 東部部会の総会がお茶の水学生キリスト教会館で開かれた。一時から礼拝が行なわれ、大滝信也氏の司会により、佐布正義氏の説教がなされた。一時半から佐布正義氏が議長となり、総会の議事が行なわれた。午後三時からシンポジウム「旧約聖書からの説教」が行なわれた。司会中沢啓介氏、発題者藤孝志氏、西満氏。夜の講演会は小島彬夫氏司会のもとに、山口昇氏によるスライド講演「黙示録の舞台とその現実——七つの教会を中心として——」がなされた。

なお同日の理事会において、新理事会の人事を次のように決定した。

理事長 丸山忠孝氏
書記 大滝信也氏
総務 横山 武氏

会計 小島彬夫氏 今野孝蔵氏
会誌 中沢啓介氏
編集 西 満氏 山口 昇氏
旧約学 津村俊夫氏 齊藤孝志氏 大山武俊氏
新約学 村瀬俊夫氏 宮村武夫氏
組織神学 宇田 進氏 佐布正義氏 小林和夫氏
歴史神学 湊 晶子氏
宗教哲学 藤巻 充氏 矢内昭二氏
実践神学 泉田 昭氏 高力弘一郎氏
なお同日正会員四名、準会員一名の入会を承認した。
六月三十日 六時—九時お茶の水学生キリスト教会館にて、理事会を行なう。十二月一日に秋の研究発表を行なうことに決定。

九月六日 六時—九時、お茶の水学生キリスト教会館にて理事会を行なう。秋の研究発表の準備、および十一月に開かれる全国理事会における議事予定事項について、東部理事会としての意向をまとめた。正会員一名の入会を承認した。

（以上）

西部部会活動報告

（一九八〇年四月から九月まで）

西部理事会書記

高橋 久之

一、第五回西部部会総会

五月十二日（月）十三時より神戸基督教改革宗長老教会にて開催

○礼拝

聖書—ローマ一章十六、十七節

説教—C・F・ヴィスロフ師

○議事

議長 鍋谷堯爾師

活動報告—現在西部部会所属会員一〇六名、準会員一二名との報告あり、専門部会も、旧約、新約、実践の三部門の活動がなされて来た。

今年度の活動方針として次の五項目を質疑応答の後、採択した。

1. 春秋の定期講演会、および研究発表の場を設ける（継続事業）。
2. 専門部会（現在旧約、新約、実践の三部門で、組織神学と歴史の部門が欠けている）の充実をはかる。
3. 研究の成果を広く発表できるように機会を考えると同時に

に、研究者への助成手段を講じる（東部部会にも働きかける）。

4. 研究資料、参考資料の相互提供の場を考慮する。

5. 中部地区の活動の強化助成をはかる。

理事の選挙、承認。

泥谷逸郎、清水汜、高橋久之、奥川泰弘、工藤弘雄、五島勝、（次点者）松田一雄の諸氏が郵便投票によって決定す。

留任理事は、有賀喜一、久保田周、中島守、鍋谷堯爾、橋本龍三、服部嘉明の六氏。

理事の互選により、

理事長 鍋谷堯爾氏

書記 高橋久之氏

会計 有賀喜一氏

編集 橋本龍三氏

ときまる。

○研究発表 五月十二日

「アブラハム・カイパーの『領域主権論』—その序論的考察—」

市川康則氏

講演会 五月十二日

「福音主義神学（その起源）の歴史的位置づけ」

丸山忠孝氏

二、理事会活動

五月十二日、六月二日、九月五日と三回にわたって理事会を開き、総会決議に基き、具体案を実施して来た。その中おもな

ものは、

○新入会員

市川康則氏（日本キリスト改革派男山教会牧師）

森上洋介氏（日本地方伝道団佐伯福音キリスト教会牧師）

窪寺俊之氏（独立折尾キリスト教会伝道所協力牧師）

太田多聞氏（西独デュッセルドルフ日本人教会牧師）

安達賢二郎氏（出雲ルーテル教会）

政所邦明氏（日本アライアンス松山協同基督教会会員）

畑野順一氏（大阪基督教短大教授）

三、研究発表

旧約部会

六月九日 京都一麦教会

「ワシテ考——エステル記研究の「考察」

畑野順一氏

「旧約における用語『終り』をめぐって」

服部嘉明氏

九月一日 大阪基督教短大

「ヨーロッパの旧約学の動向について」

鍋谷堯爾氏

新約部会

七月七日 大阪基督教短大

「マルコの文体について」

久保田周氏

九月八日 神戸ルーテル神学校

「北欧における新約学の動向」

エヴィエダール氏

西部部会も若い有為の会員が多くおこされ、活動も徐々にではあるが、活発になって来ている。そうした中で、西部という拡がりの中で各地の会員活動が出来るように助成しようという動きが、中部地区独立への働きかけとなって来た。

また、学会の活動の中で、当然問題になる「福音主義神学」の確立に当って、「学会」としての対応は諸教会にとって大きく影響をあたえるようになってきている。体質の健全化と向上の斗いは、今後もっと表面化すると思う。こうした中で、諸外国の学会との交流が、正式になされることを期待する。